

令和7年度 学校評価重点目標及び取組と評価指標

令和7年2月

本年度重点目標	具体的な取組	評価指標	判定基準	集計結果	自己評価	分析(成果)(課題と改善策)	最終評価
<p>【学びが楽しい学校づくり】 体験活動や学び合いを基に、一人一人が活躍すると共に共感的な人間関係づくりが図れる授業を目指し、学習意欲の向上と自己肯定感を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 震災後の児童の心のケアを、外部の専門家ともつながりながら継続して行っていく。 生徒指導の4つの視点（自己存在感の感受・共感的な人間関係の育成・自己決定の場の提供・安全・安心な風土の醸成）を生かした授業づくりを行う。 学び合いを充実させるために、児童自身が課題意識をもって主体的に学びたいような授業を目指す。また、基礎基本が定着するように粘り強く指導する。 教科間や学級活動、学校行事とのつながりを意識し保護者や地域の方々と共に計画的に学習を進めていく。 	<p>(児童アンケート) 「学校で学ぶことは、楽しいですか。」 ア 楽しい イ だいたい楽しい ウ あまり楽しくない エ 楽しくない (保護者アンケート) 「子どもは学校へ意欲的に登校していますか。」 ア 意欲的に登校している。イ おおむね意欲的に登校している。 ウ あまり意欲的ではない。エ 意欲的ではない。 (教職員アンケート) 「生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに努めている。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない 「基礎基本の定着を粘り強く指導している。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない</p>	<p>児童アンケート・保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが80%以上 D…それ以下</p>	<p>(児童) 97% (保護者) 97% (教職員) 100%</p>	<p>A</p>	<p>(成果) ・「ア 楽しい」「イ だいたい楽しい」という肯定的な回答をする児童の割合が引き続き高い。さらに、中間評価に比べて、今回のアンケートでは強い肯定的回答(ア)の割合が低学年においては14.3%も増えている。 ・2学期は、たくさんの行事があった。それに向けて学年や個に応じた目標をもって取り組み、達成感や自己有用感の向上につながったのではないかと考えられる。学習面においては、自分の学びを振り返り課題解決につなげることができている児童が増えた。勉強がわかる・できることは登校への意欲に大きく関わることである。 (課題と改善策) ・高学年では、中間評価では見られなかった否定的な回答「ウ あまりそう思わない」がわずかに見られた。学習内容が難しくなるため、教師は生徒指導の4つの視点をさらに大切にし、どの子ども勉強がわかる・できる授業づくりをしていかなければならない。また、どの学年においても、進級に向けて授業や家庭学習の中で基礎基本の定着に粘り強く取り組んでいかなければならない。</p>	<p>A</p>
<p>【主体的に課題解決する児童の育成】(学校研究) 個別最適化された学びと協働的な学びの実現を目指し、教科の学びを課題解決へとつなげることができる児童を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各教科で身につけさせたい資質能力の習得につながる学習活動や学び方を複数用意し、児童が自分に適したものを選択できるようにする。 各単元で、どのような力をつけさせることをねらうのか、そのためにどのような手立てが必要なのか検討して指導を行う。 児童が自分の学びを振り返ることを設定し、自己の成長のために主体的に学ぶことを促す。 	<p>(児童アンケート) 「自分の学びを振り返り、次の学習につなげた。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (教職員アンケート) 「子どもたちに学び方や学ぶ内容を選択させる場面を設定した。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (単元末テスト) ア 平均80ポイント 全員7/7 イ 平均60ポイント全員7/7 ウ 平均60ポイント 一部7/7 エ 平均60ポイント以下</p>	<p>児童アンケート・教職員アンケート・単元末テストともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが80%以上 C…ア+イが70%以上 D…それ以下</p>	<p>(児童) 94% (教職員) 100% (単元末テスト) 100%</p>	<p>A</p>	<p>(成果) ・授業の中で子どもにどのような力をつけたいのか、その学習を通してどのような問題が解けるようになればよいか具体的な姿を思い描いて授業することで、子どもへの声かけや個別支援を明確な意図をもって行うことができるようになった。その成果として、児童も意図や目的をもって自らのように学ぶかを選択するようになっていた。 ・児童に自己の学習を振り返る習慣が身につくように繰り返し指導することで、自分がどのように学んだから成長できたのか見つけなおすことができる子どもが増えつつある。 (課題と改善策) ・各授業の中で行った良い学び方を、他の場面で活かすことができている子どもが少なく、理想とする学び方を「いいだの学び方」として冊子にまとめ、教師と子どもで共有することを通して、どのような場面でも課題解決に必要な学び方を自ら選択できるようにしていきたい。</p>	<p>A</p>
<p>【家庭学習の確立】 保護者と連携し、子どもたちの家庭学習の習慣化を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 音読や漢字・計算練習(高学年は自学ノート)を基本に、学年に応じた家庭学習の時間を確保する。 家庭学習強化週間は特に、お便り等で呼びかけを行う。また、学級懇談では、家庭学習のてびきを活用し日頃の家庭学習の取組について確認し、改善していく。必要に応じて、個別指導も行う。 一日の最後に、学びを振り返る時間(ぐんぐんタイム)を設定し、家庭学習の計画を立てるように促す。 	<p>(家庭学習調査結果) ・家庭学習強化週間記録カードをもとにした、家庭学習の目標(低学年20分・中学年40分・高学年60分以上)達成者数 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 60%未満</p>	<p>A…ア B…イ C…ウ D…エ</p>	<p>イ 70%</p>	<p>B</p>	<p>(成果) ・5月の調査では各学年の目標時間を学習することができていた児童は42%だったが、12月の調査では70%になった。学期末の漢字まとめテストや、各学年の評価問題などの目標を設定して家庭学習に取り組んできたことが意欲の向上につながったと考えられる。また、クローズドブックを活用して「オンラインドリル」というA1ドリルに家庭で取り組む期間を設定した。その成果として、自主的に自分に合った学習に取り組めるようになってきている。 (課題と改善策) ・家庭学習の取組状況に差が見られることが課題として挙げられる。調査の中で多くの児童が学年の目標時間を達成できているのに対し、目標時間の半分にも満たない児童が7人もいた。家庭学習に取り組めない原因としては、生活リズムの乱れや、家庭学習よりもゲームやネットでの動画視聴を優先してしまうことが考えられる。今後は、保護指導とも連携して家庭学習の習慣化に努めていきたい。</p>	<p>B</p>
<p>【特別活動の充実】 学級生活や学校生活をよりよくするために、児童同士の関係作りを進め、課題を発見し、話し合い、合意形成を図り、意思決定して課題解決に向かう児童を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動や代表委員会、委員会活動等において話し合う活動の時間を確保する。 児童が自主的・実践的に取り組むことを通して、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、課題を共有し、合意形成しながら解決に向かわせる。 週1回以上ホワイトボードミーティングを行う。 	<p>(児童アンケート) 「友だちの考えを聞きながら、自分の考えを話すことができています。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない (教職員アンケート) 「児童同士の話し合いの場を設定し、課題意識の共有・合意形成が図られるように取り組んでいる。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない</p>	<p>児童・教職員アンケートで A…児童ア+イが90%以上かつ職アが100% B…児童ア+イが80%以上かつ職ア90%以上 C…児童ア+イが70%以上かつ職アが80%以上 D…それ以下</p>	<p>(児童) 90% (教職員) 82%</p>	<p>C</p>	<p>(成果) ・引き続き肯定的な回答を行った児童の割合は全体で9割に達している。自分の考えを表現することに苦手意識を持っていた児童が、進んで発表するようになるなど、自ら話すとする態度が身につけてきた。 ・教職員は「そう思う」の回答が前回から27%増加し約8割となった。計画的に行われている校内研修を通して、目指す児童の姿を職員全体で共有し普段の授業実践に臨むことで一人一人の意識が高まっている。 (課題と改善策) ・児童においては肯定的な回答の総数に変化はなかったものの、「そう思わない」の回答が増えたことから、話すことに抵抗が強くなった児童もいると考える。そこで、話し方のお手本を示すなど、苦手意識のある児童も自ら話したいと思うような手立てを引き続き考えていく。教職員においては強肯定的な割合を目標の100%にしたい。実践共有や意見交換を通して、具体的な場面を職員全員が想起できるようにする。</p>	<p>B</p>
<p>【規範意識の高揚】 社会的なルールやきまりの意味を理解させ、大切にすることを高め、いじめや差別、暴力のない学校をつくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 毎月、代表委員会を中心に学校目標を設定し、社会的なルールやきまりに対する理解を深めるとともに、自ら進んで守ろうとする態度を育てる。 全職員が全校児童の担任であるという意識を持ち、児童の様子を観察することで、いじめの兆候の早期発見を目指す。さらに、学期に1回程度いじめ撲滅集会などを通して、いじめや暴力行為のない学校づくりを目指す。 	<p>(児童アンケート) 「代表委員会による学校目標が守れましたか。」 ア できた イ どちらかといえばできた ウ あまりできなかった エ できなかった (保護者アンケート) 「学校は、いじめや暴力行為のない学校づくりに努めていると思いますか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ あまり思わない エ 思わない</p>	<p>児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが95%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが75%以上 D…それ以下</p>	<p>(児童) 98% (保護者) 100%</p>	<p>A</p>	<p>(成果) ・児童アンケートでは肯定的な回答が前回から4%増えて98%となった。児童が主役となって活動する機会が設けられており、学校全体の目標を意識して行動ができていた。 保護者アンケートは前回に引き続き対象の項目の肯定的な回答が100%だった。いじめアンケートの実施や児童理解の会における児童の実態把握と共有を欠かさず行っていることで、未然防止、早期発見・解決を図ることができている。 (課題と改善策) ・保護者アンケートの対象項目について、強肯定が少し減少している。校内で行っているいじめ未然防止の取り組みを、保護者の方により知っていただけるような取り組みを行っていく。</p>	<p>A</p>
<p>【自己健康管理能力の向上】 めあてを持って、自らよりよい生活習慣を実践しようとする態度を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「早寝早起き朝ごはん」をはじめとした規則正しい生活習慣の確立を目指し、学期毎に「バランスアップ週間」を設定して取り組む。 児童会で「就寝時刻」「起床時刻」「メディア時間」のめあてを決め、保護者の協力を得て達成度チェックを行い、よりよい生活習慣の実践を目指す。 学校保健委員会を開催する。 	<p>(バランスアップカードの結果) ・早起きのめあて(7時まで)に起床する)が達成できたか。 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 50%未満</p>	<p>バランスアップカードで A…ア B…イ C…ウ D…エ</p>	<p>めあて達成度 87.5% (平日94%・休日81%)</p>	<p>A</p>	<p>(成果) ・5月と11月のバランスアップ週間の起床時刻調査で、学校のめあて達成率は88%。 ・平日休日を問わず、一定の生活リズムを作るための起床時刻めあて7時が児童保健委員会の呼びかけや長期休業の取組等から達成率はアップしている。平日と休日の時間差は1時間以内が望ましく、1時間以上の児童は数人で昨年度に比べ減ってきている。 (課題と改善策) ・起床時刻を決めてしっかりと意識して取り組めば新しい「習慣」になり、体内時計のリズムの安定に繋がる。覚醒は自分の意志でコントロールできるので継続した指導と保護者の協力を呼びかける取組を行っていく。</p>	<p>A</p>
<p>【家庭・地域との連携協力体制の確立】 家庭や地域と学校との繋がりを大切に、PTAや学校運営協議会を中心にして協働をはかる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 保護者・地域とつくるカリキュラムの実践を進め、地域とつながる場を設定する。 学校ホームページ、学校だよりや学級だより等を通じて、学校の様子を知らせる。 懇談等を通して、震災後の諸課題について家庭・地域とともに考えていく体制づくりをする。(学校運営協議会への参画) 	<p>(保護者アンケート) 「学校は、学校評価アンケートや学級懇談会、学校運営協議会などを通して、保護者や地域の思いを受けとめ、よりよく改善しようとしていると感じますか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ 思わない (教職員アンケート) 「学習状況や学校生活の様子、担任の思い等を学校だより、学級通信、HP等で情報発信を行い、保護者との連携が図られている。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった 「保護者・地域とつくるカリキュラムを実施している。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった</p>	<p>保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが80%以上 B…ア+イが70%以上 C…ア+イが60%以上 D…それ以下</p>	<p>(保護者) 98% (教職員) 100% (教職員) 100%</p>	<p>A</p>	<p>(成果) ・保護者アンケートでは98%、教職員アンケートでは100%が肯定的な評価となり、保護者・地域とつくるカリキュラムづくりが少しずつ定着してきたことが考えられる。8月に実施した取組の見直しを生かしながら意図的に活動を構築し、子ども・職員・保護者・地域が震災後の課題を共有し、熟議や協働的な実践につながったことが成果につながった。 (課題と改善策) ・参加する保護者や地域の方々の幅をさらに広げていくことや、学校からの発信だけでなく、意見や思いが行き交う双方向のやりとりを充実させていくことが今後の課題として挙げられる。また、熟議の場がより活発で深まりのあるものとなるよう、話し合いの工夫も必要である。今後は、地域とつながる機会をこれまで以上に大切に、学校ホームページや便りを通して丁寧な情報共有を進めるとともに、学校運営協議会を中心に家庭・地域と協働できる体制を整え、地域に開かれた学校づくりを一層推進していく。</p>	<p>A</p>
<p>【業務改善】 教職員が、心身ともに健康で、明るく元気に児童と向き合うため、一月の超過勤務を45時間以内に抑える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 毎月、第3水曜日を定時退校日とする。また、個別で毎月2回マイ定時退校日を設定する。 予定退校時刻を設定し、週案に記載することで、時間管理を意識した働き方を推進する。 最終退校時刻は、19:00とする。 行事の内容精選や準備の縮小を進め、計画的に企画・提案を行うことで業務軽減を図る。 8月12日～15日、4日間を学校閉庁日とする。 PTAの会合等で取組に対する理解を求める。 	<p>(勤務時間調査) ア 19時超過が月4日以下、且つ、全員の超過勤務が45時間以内 イ 19時超過が月4日以下、且つ、平均の超過勤務が45時間以内 ウ 19時超過が月8日以下、且つ、全員の超過勤務が60時間以内 エ 19時超過が月9日以上、且つ、平均の勤務時間が60時間以内 (教職員アンケート) 「困ったことを言い合ったり、挑戦する場があったりして働きやすい。(働き甲斐がある)」 ア そう思う イ だいたいそう思う ウ あまりそう思わない エ 思わない</p>	<p>勤務時間調査と教職員アンケート A…ア+ア+イが90%以上 B…イ+ア+イが80%以上 C…ウ+ア+イが70%以上 D…エ+ア+イが60%以下</p>	<p>(勤務時間調査) 超過勤務平均月3日 平均の超過勤務45時間以内 (教職員) 100%</p>	<p>B</p>	<p>(成果) ・19時以降の超過勤務の日数については個人差があるものの、行事の多い月には増加する傾向が見られた。学校全体で平均すると、一人あたり月3日程度で推移している。また、9月から12月にかけての月ごとの超過勤務時間は平均4.5時間以内に収まり、一定の範囲で管理されていることが分かった。業務改善に関する研修を行ったことで勤務時間への意識が高まったものと考えられる。 (課題と改善策) ・業務に偏りがあり、依然として勤務時間の改善が進んでいない状況も確認されている。そこで、来年度に向けて学校全体で業務の見直しを進めていく。まず、日々の業務を振り返り、どの業務にどれだけ時間がかかっているのかを共有しながら、負担の偏りを見つめ直す。あわせて、業務の再配分や役割の調整を行い、無理のない働き方につなげていく。また、行事が多い時期に業務が集中しないよう、年間計画の段階で業務量を調整する工夫も取り入れていく。</p>	<p>B</p>

学びに向かう力の育成と学力向上

いじめ・不登校のない学校づくり

学校と家庭地域の連携

業務改善

評価: A 達成 B おおむね達成 C・D 改善が必要

